

四定海集高傳

くさひんむすぶせいのたり志

編輯

川上氣遠

画工

梅堂國政

梓

金松堂辻文

表上 五編  
一頁一編一張  
大尾



A 485  
56



國定忠次

義名高島

女海

川土

土卷

氣邊著

梅堂

周政画

金松堂



48-8215

人虎名革と止むるといふ古人が名言あり是の忠次が  
 義名と小團次が名譽の世も高島あるを知らざる人も  
 かくくと新古の事實も續く玉琴縁の繁き糸道と  
 おぼつたをて手解きの及ぬ筆小書まの爪をあらわ  
 齒もたれど今更さんとせんすはかくボツラくの雨ぐれ  
 ぬやうにもあまの一心漸々五編とせよとめたるを  
 三味線よりわらで子鼠があらうまらうとぬまかどり明  
 たる穴とあまの術よく生とけはる鏡面皮を押し  
 業の始より終耻の序言子鼠小僧と悔書ぬ

明治十三年四月

川上鼠邊述



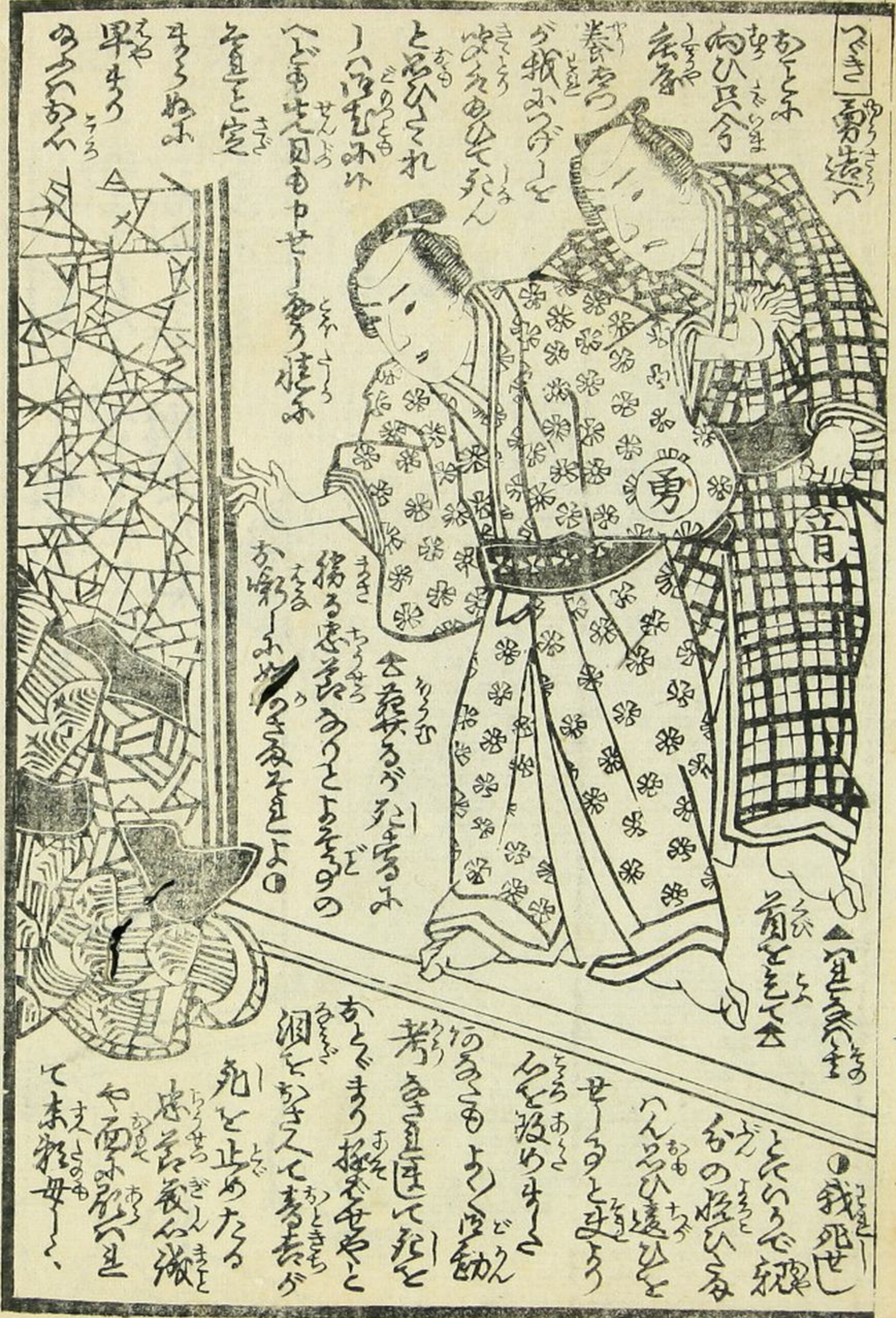
五十五



匡定五上



かくて又去るが如きかまへに願の成りふおこの  
 船倉の薄子のまゝよりゆきも脱けおこす  
 是へいふふ向ふまゝよりゆきも脱けおこす  
 尚んとあまありさる  
 おまへに思ふあまありさる  
 とをより後入るあまありさる  
 勇造 おまへに思ふあまありさる  
 もえせ入てこの作  
 なるより後入るあまありさる  
 むらう 勇造  
 向ふとりのだんたへ  
 おまへに思ふあまありさる  
 中の方よりあまありさる  
 外のことよりあまありさる





つぎ かくてその由を  
 赤城あらーのいこま  
 かこ花よつたさ  
 身の内末とあふり  
 さつてさる鐘の七つ  
 滞りの初る勇造  
 由同く仲のたか  
 のちつとと  
 あふり  
 ふ向ひ  
 まを色

あれど  
 又  
 ツ  
 の  
 雅  
 の  
 全  
 自  
 全  
 場  
 又  
 二人の  
 田  
 忠次  
 かん



かくせし  
 忠次  
 勇造  
 自  
 由  
 赤城  
 身の内  
 さつて  
 滞り  
 由同  
 のち  
 あふ  
 ふ向  
 まを

子  
 危  
 を  
 あ  
 全  
 の  
 面  
 赤  
 身  
 懐  
 さ  
 由  
 かん





つぎ 知らぬ作傳の家内の  
 者ハ務ノ事小紀めてくれ  
 べつしう音勝てさう思む  
 旭ハ産きたのぬすを推し  
 明一やと尋ぬる勇造  
 者者ハ立出てる小を  
 の小つハ風ようち打く小  
 とハ初めを織あての中  
 りーりうと立戻りて松  
 子と見る小奪は道  
 物とてあけは  
 合兵由うとしか  
 してか終を現  
 けは何しうもぬけ



顔見合せ  
 勇造のつ  
 もとを  
 うち  
 食  
 伝  
 仕  
 合  
 小  
 定

のうらまへ一丈  
 トと家内の  
 年勤勇造  
 考考たどめと  
 してを所の者と  
 やとみまら  
 よ彼処とぬね  
 くと更みけ  
 清の都はざれハ  
 尋ねらざとて  
 七ッはく一  
 立ぬり聖目又再び  
 尋ねんと我家くへ  
 帰りくるは家内の者ハ



夜かどくおけ  
 踏む白多ハ  
 村は  
 考考たどめと  
 してを所の者と  
 やとみまら  
 よ彼処とぬね  
 くと更みけ  
 清の都はざれハ  
 尋ねらざとて  
 七ッはく一  
 立ぬり聖目又再び  
 尋ねんと我家くへ  
 帰りくるは家内の者ハ

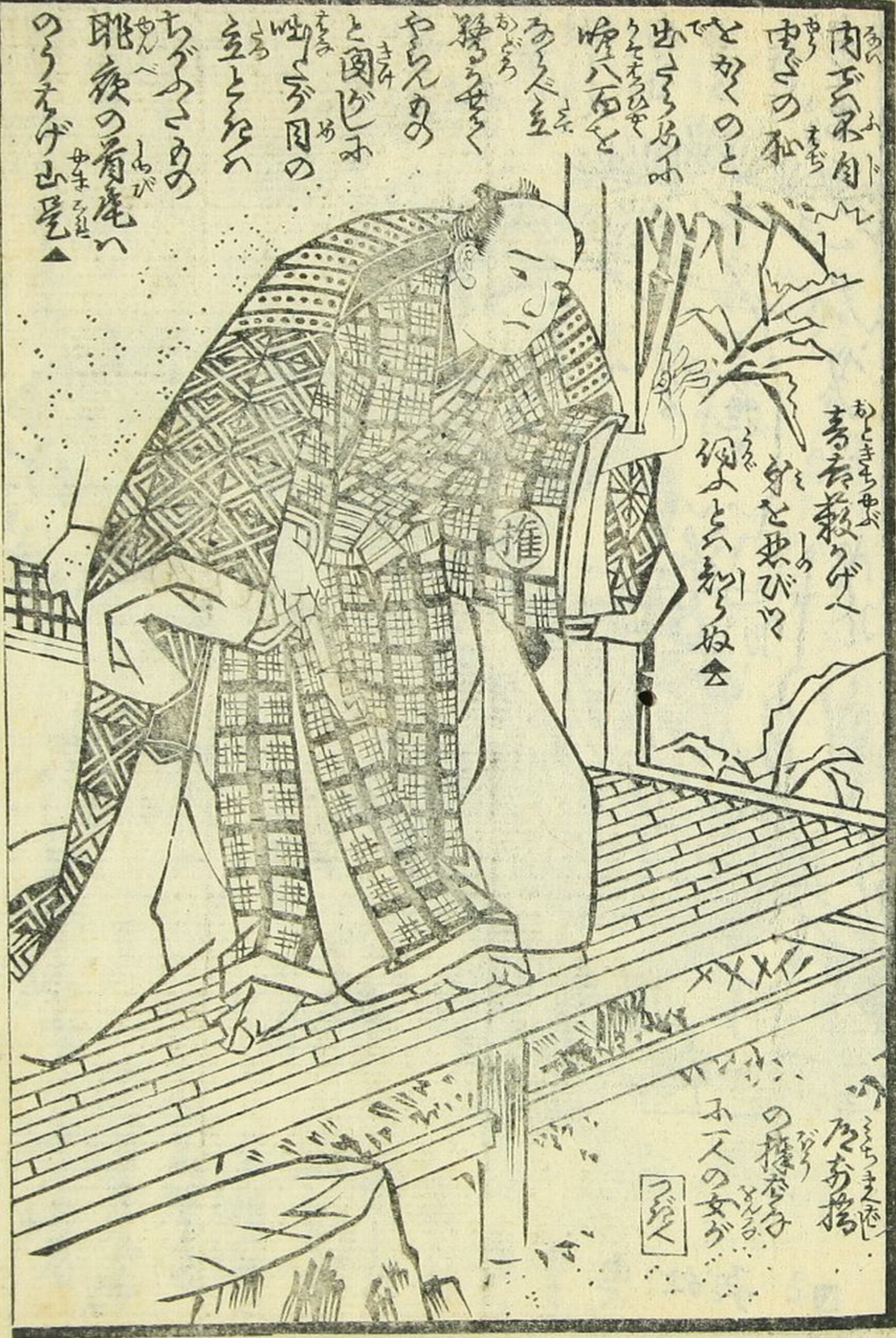
つぎに ぬすびと村とやら出候に  
 是れ一巻稿への名をいふと  
 向へて速なる研ぎざんふ  
 一人の男志由ふるくのも  
 元山月本定のお坊主  
 忠次の舟おんとやう勇造  
 とらぬぬと

えんげいもあ  
 こごとと忠  
 次が自舟  
 せしむを  
 大ききうふ  
 影と金  
 がまて六半



かか  
 一ツあかりとと松の根  
 腰ち掛る振ふふ

公の之の文はまう大い煙草  
 あらうまを夜にわらうと文持  
 今野呂八がふるもむあはは  
 わくやふらう智の



肉と不自  
 雲の私  
 せかくの  
 出さるあふ  
 喉八面を  
 あんま  
 髪うま  
 やらんあ  
 と園じふ  
 叫ぶ月の  
 立とた  
 ちかこの  
 昨夜の首尾  
 のうまが山尾

考を教うて  
 船を悲び  
 何よと六朝の板

の標を  
 不人の女  
 三





つぎ  
萩の夕  
悪徳天令  
さびしきと後をの  
よせま切つる白刃の  
老りおぼろしくそ  
遊人とほる虎助が  
府はまの山切られあつと  
さびし例るひさし山切られぬ

運を切て  
かちをるもあつと  
一ふらつる若者  
が一歩さけんてあつと  
先んが山がまき続るらつと  
うちを正しつらつと

朝鮮  
官  
許  
名法  
牛肉丸  
大包代二十五支  
中包代十二支  
小包代六支  
厚毛

官  
許  
天泰丸  
たんせいの丸  
百代代厚毛

此天泰丸と我身一たんせいの丸  
そつとらんてあつと  
さびし例るひさし山切られぬ  
一切の事月ひて功経進らあつと  
徳しつと本柱まはつと

菱  
錦繪問屋  
地本問屋  
出板御届明治五年四月九日

金松堂  
日本橋區横町三丁目番地  
出板人 辻岡丈助

本所区元田廿五番地  
編輯人 川上謂一郎



扇に書かれた文字：  
義名忠之丞  
高路の  
大

三社御祭

金松堂版

元田殿長

中

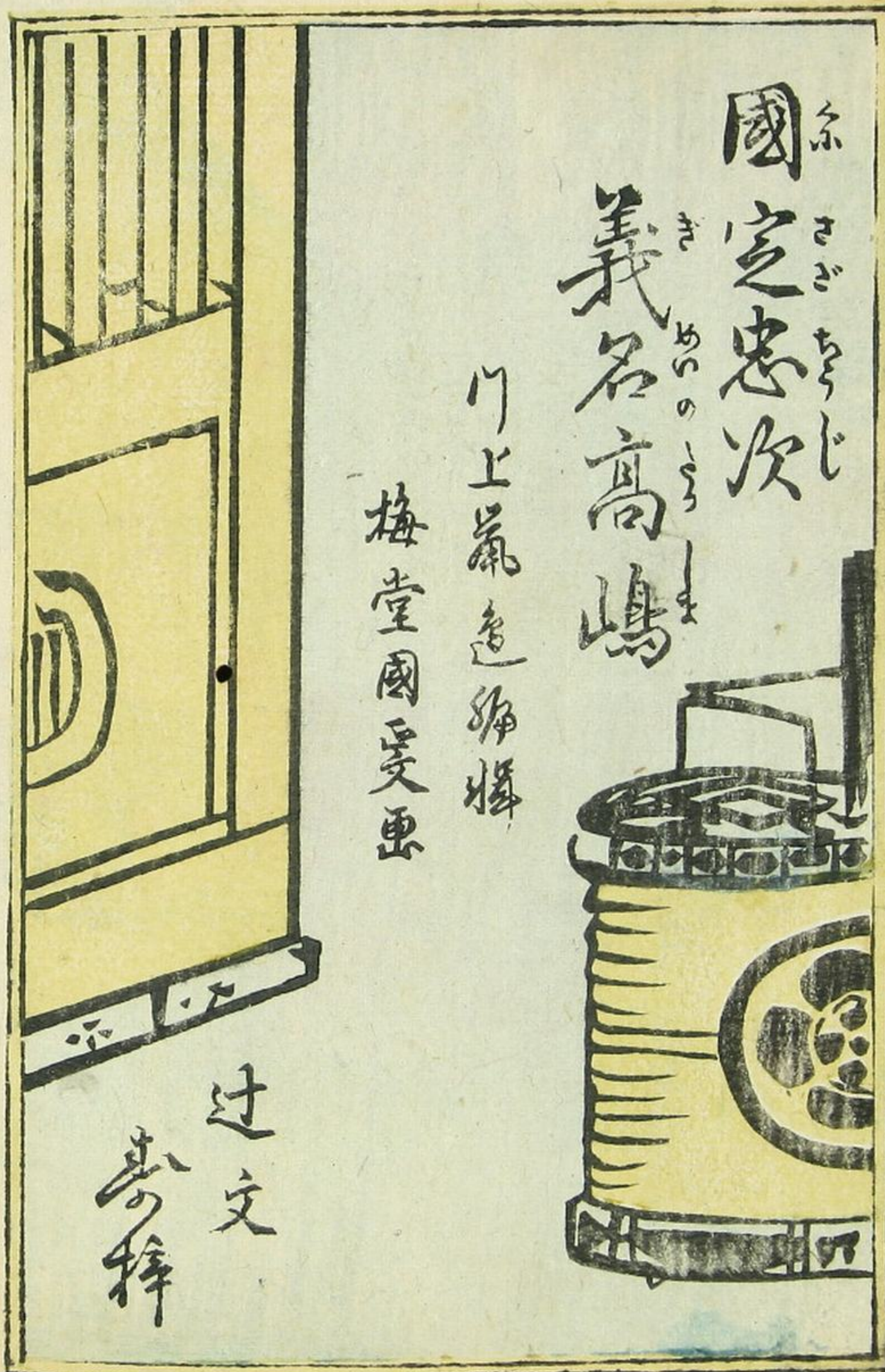




上巻 野 野はへらち区  
 出て迹かまかこの  
 松のまはたより願はま  
 出る縁傍が突ゆま  
 ぶらよ野はへ  
 何ぞうとわま  
 のひるる金(世)  
 欠きある者者へ  
 傍と曲者ども助分  
 と思ひわづらと切ららと縁  
 傍も又者者と城ありと名は  
 みちまひよ事ふ女日の有中  
 こまといわぬかまこい杖杖のつぎを  
 らぬと縁のまのらちけは湯く煮

法と  
 野  
 縁  
 傍  
 の  
 事  
 者  
 者  
 へ  
 助  
 分  
 と  
 思  
 ひ  
 わ  
 ら  
 と  
 切  
 ら  
 ら  
 と  
 縁  
 傍  
 も  
 又  
 者  
 者  
 と  
 城  
 あり  
 と  
 名  
 は  
 み  
 ち  
 ま  
 ひ  
 よ  
 事  
 ふ  
 女  
 日  
 の  
 有  
 中  
 こ  
 ま  
 と  
 い  
 わ  
 ぬ  
 か  
 ま  
 こ  
 い  
 杖  
 杖  
 の  
 つ  
 ぎ  
 を  
 ら  
 ぬ  
 と  
 縁  
 の  
 ま  
 の  
 ら  
 ち  
 け  
 は  
 湯  
 く  
 煮

上巻



國定忠次

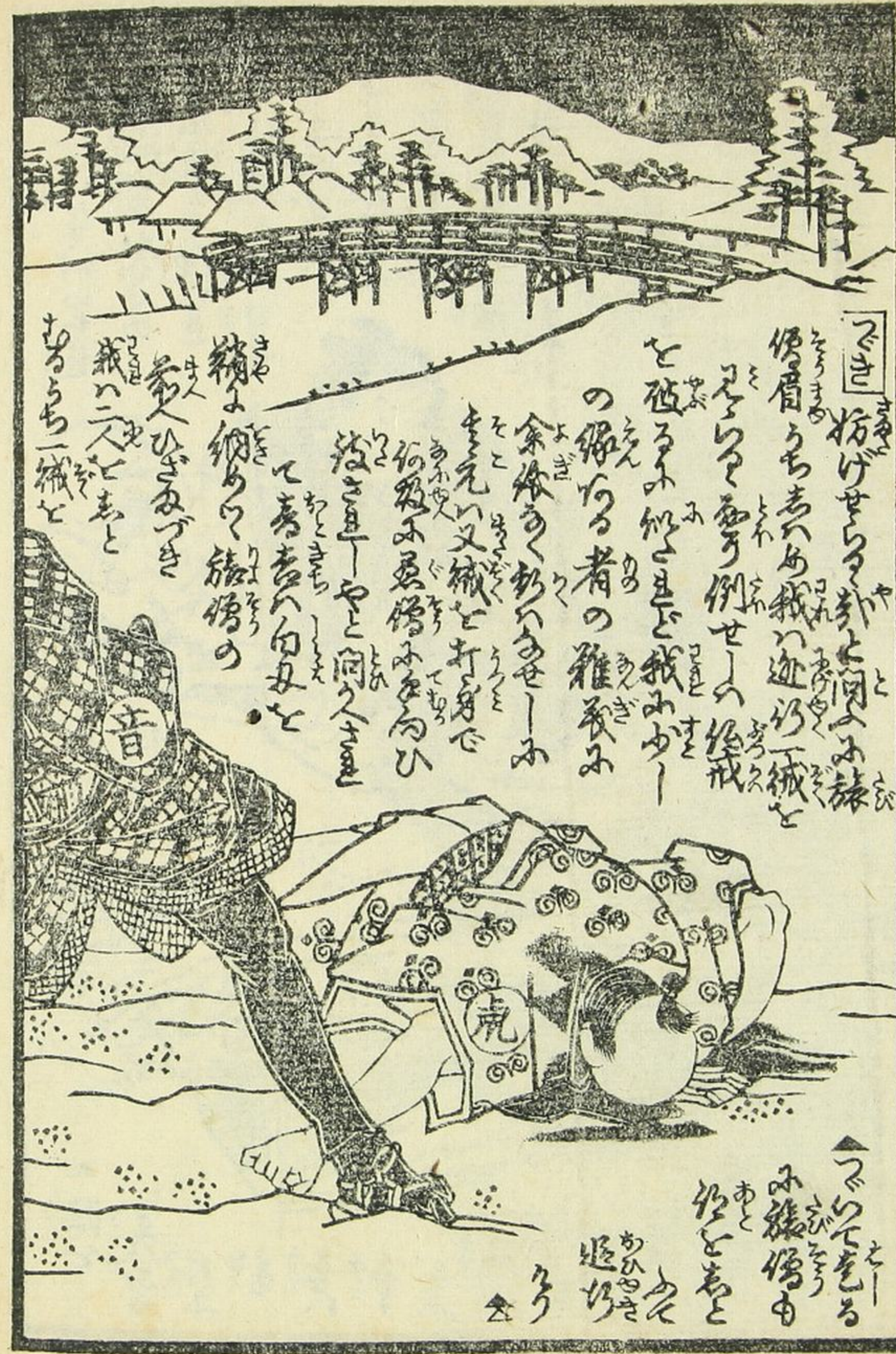
義名高嶋

川上氣色細撰

梅堂國定画

過文

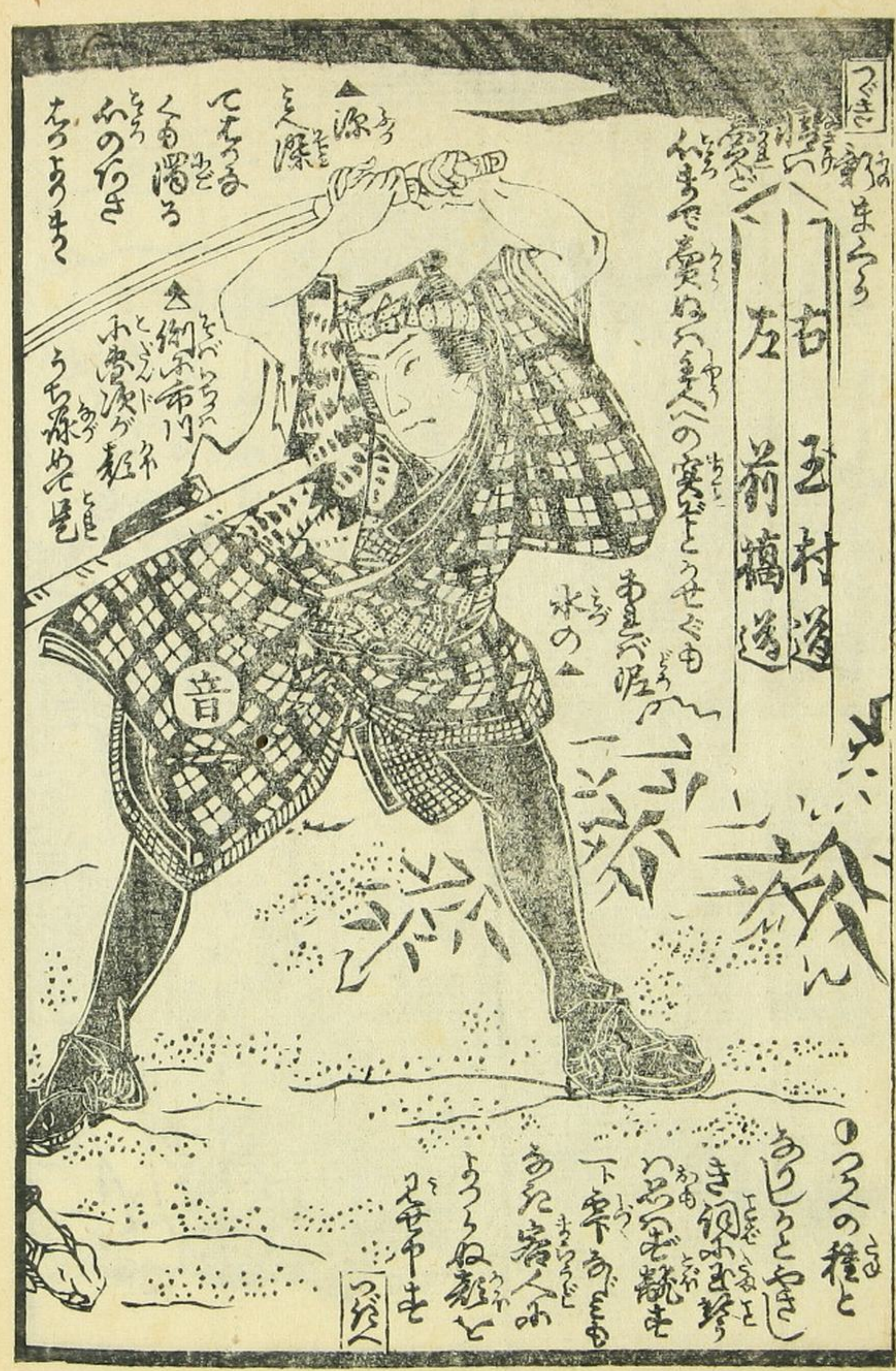
奇癖



目次五

目次五

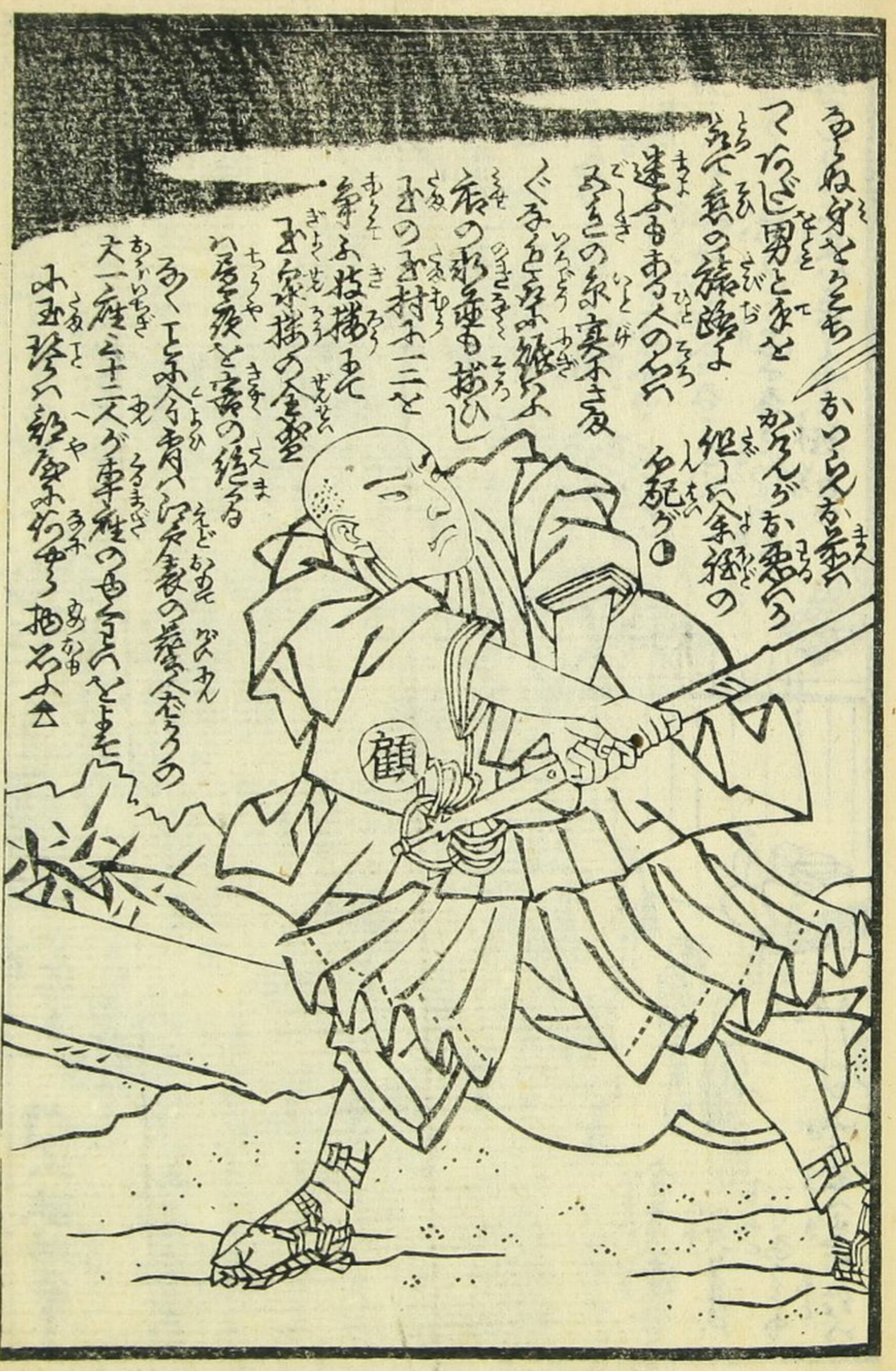
古 五村道  
左 前橋道



源  
足深  
てらふま  
くも溜る  
ふのちき  
たつよりま

△御衣布川  
△水  
△音  
△水

○つたの権と  
あじろとやま  
まねみま  
あは若人  
うらぬ  
とせりま



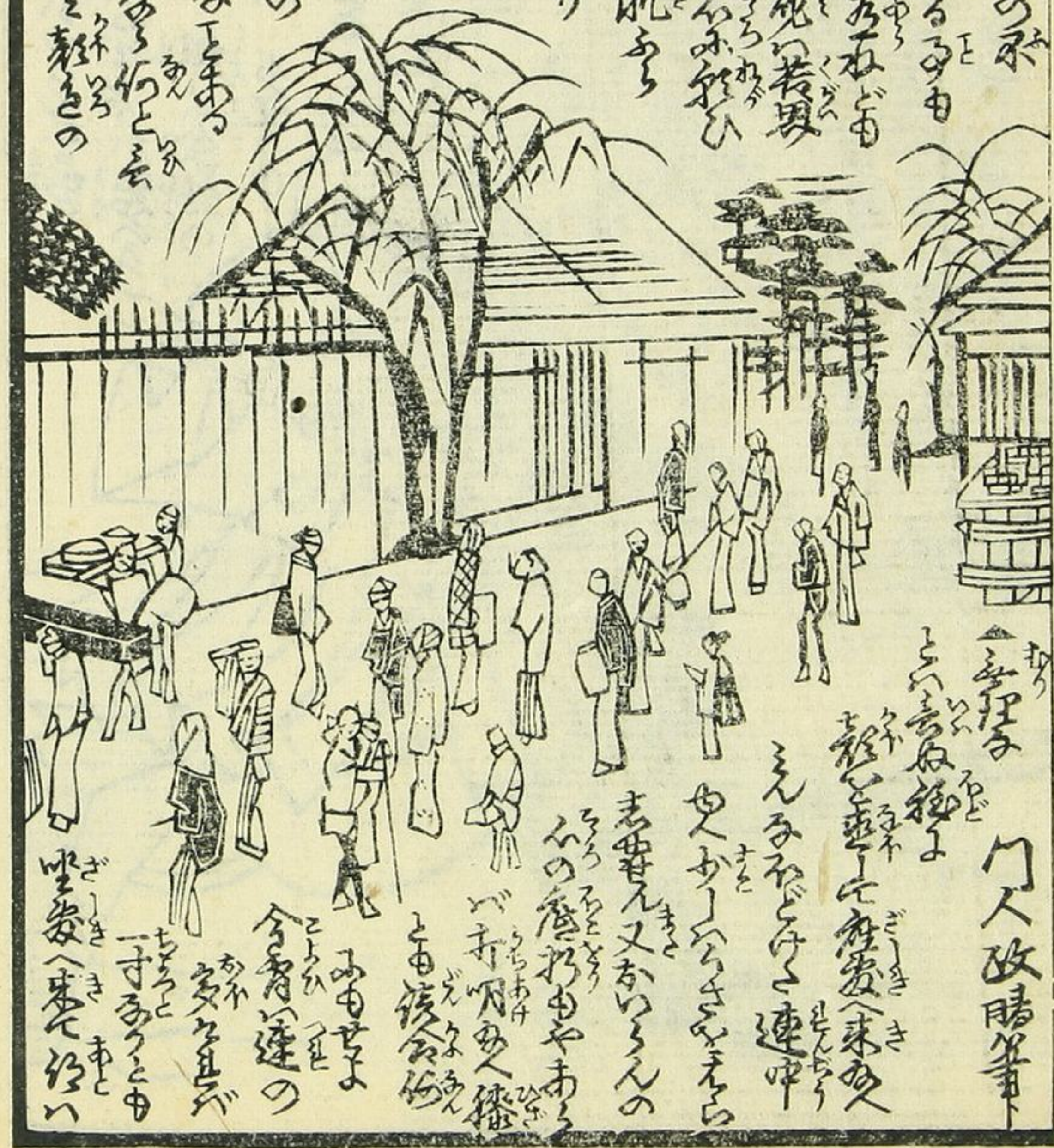
あな身とち  
つたに男とち  
あな身の縁路よ  
迷ふもある人の  
あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ

あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ  
あな身の縁路よ



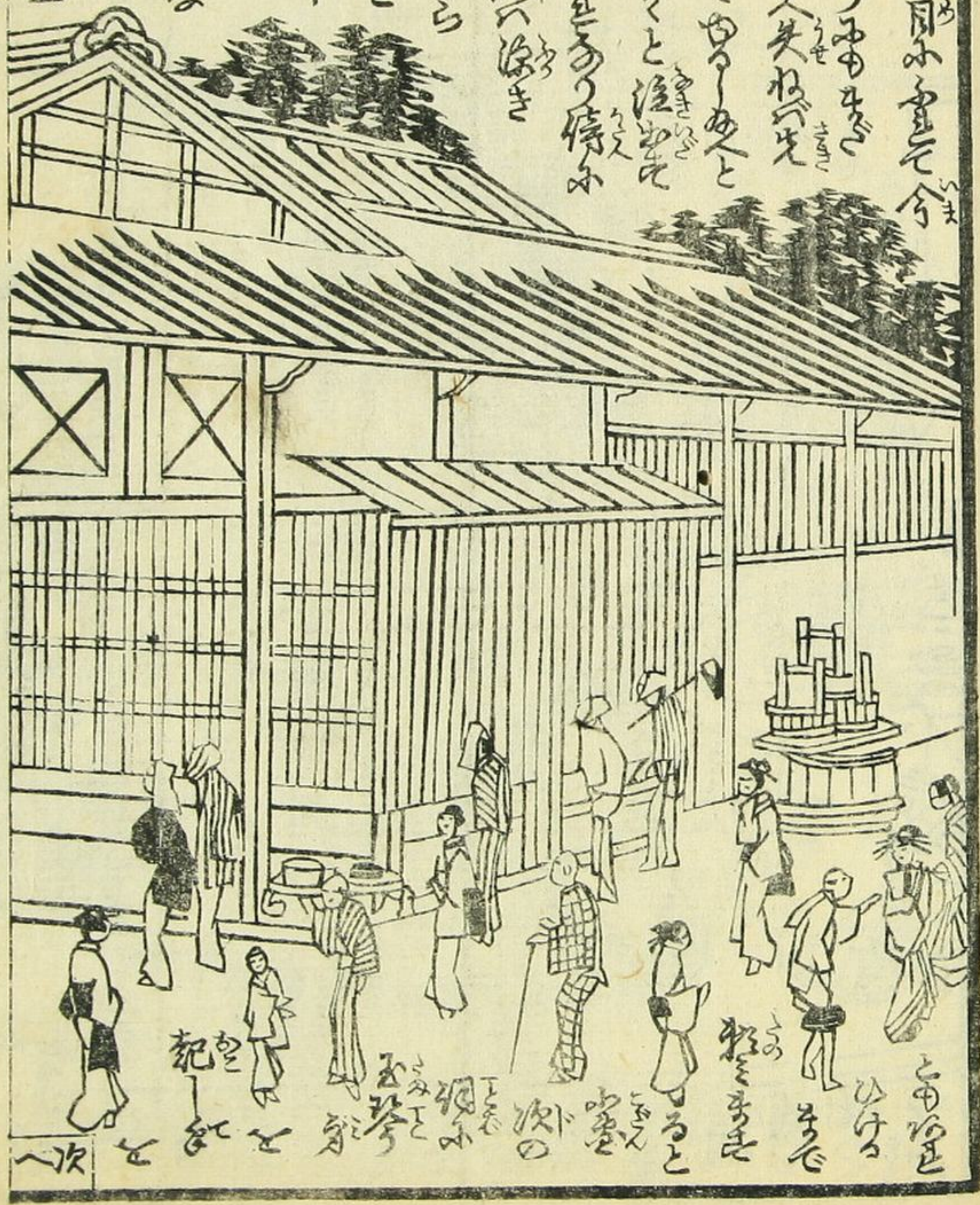
玉村の遊廓繁栄の図

玉村の遊廓繁栄の図  
 遊廓の繁栄は、玉村の中心地を占め、人々の集まる所である。遊廓には、遊藝、歌舞、飲食などがあり、人々の娯楽の場となっている。玉村の遊廓は、昔から有名で、多くの人々が訪れる。遊廓の繁栄は、玉村の発展の象徴である。



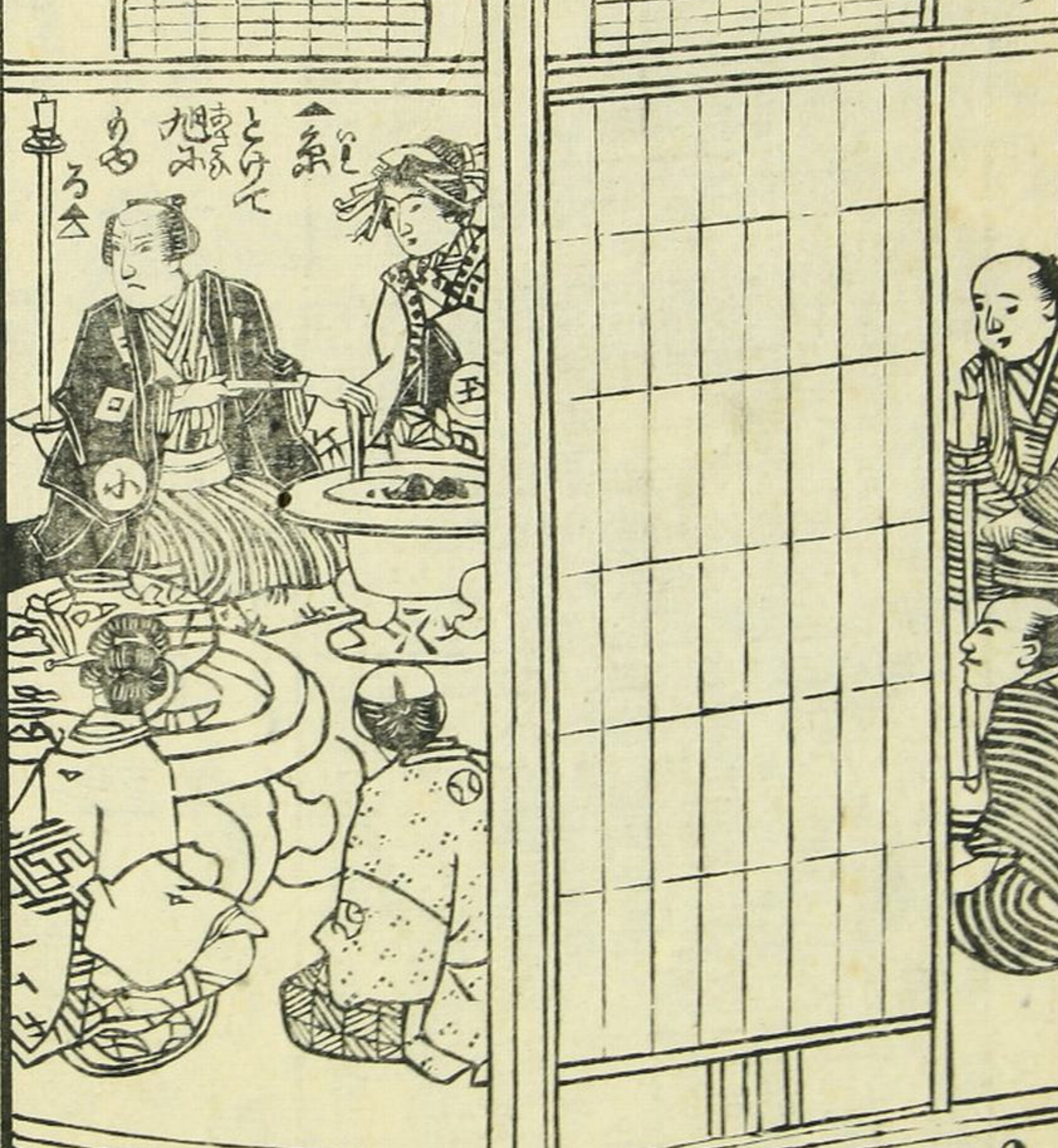
玉村の遊廓繁栄の図  
 遊廓の繁栄は、玉村の中心地を占め、人々の集まる所である。遊廓には、遊藝、歌舞、飲食などがあり、人々の娯楽の場となっている。玉村の遊廓は、昔から有名で、多くの人々が訪れる。遊廓の繁栄は、玉村の発展の象徴である。

玉村の遊廓繁栄の図  
 遊廓の繁栄は、玉村の中心地を占め、人々の集まる所である。遊廓には、遊藝、歌舞、飲食などがあり、人々の娯楽の場となっている。玉村の遊廓は、昔から有名で、多くの人々が訪れる。遊廓の繁栄は、玉村の発展の象徴である。



玉村の遊廓繁栄の図  
 遊廓の繁栄は、玉村の中心地を占め、人々の集まる所である。遊廓には、遊藝、歌舞、飲食などがあり、人々の娯楽の場となっている。玉村の遊廓は、昔から有名で、多くの人々が訪れる。遊廓の繁栄は、玉村の発展の象徴である。

つぎ 引はるを長  
席下余の目ハ  
解てるあれ  
心解ぬちるハ  
の関明くさハ  
是ぬ必のうハ  
表はふのうハ  
りなれおて  
小窓次はた如  
あつちもお終  
さきん夜毎  
るふ全用もま  
小窓ハ解ねとも

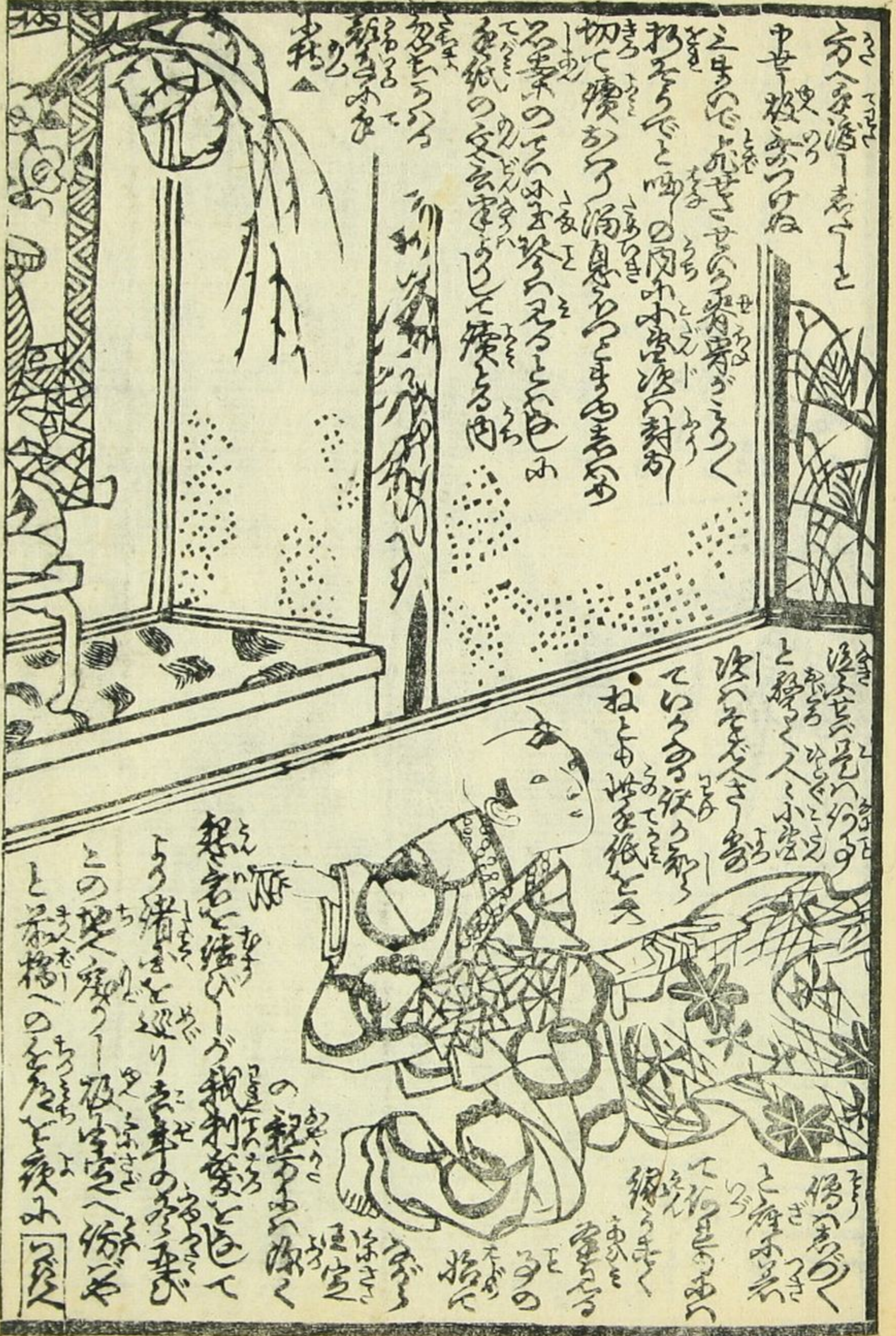
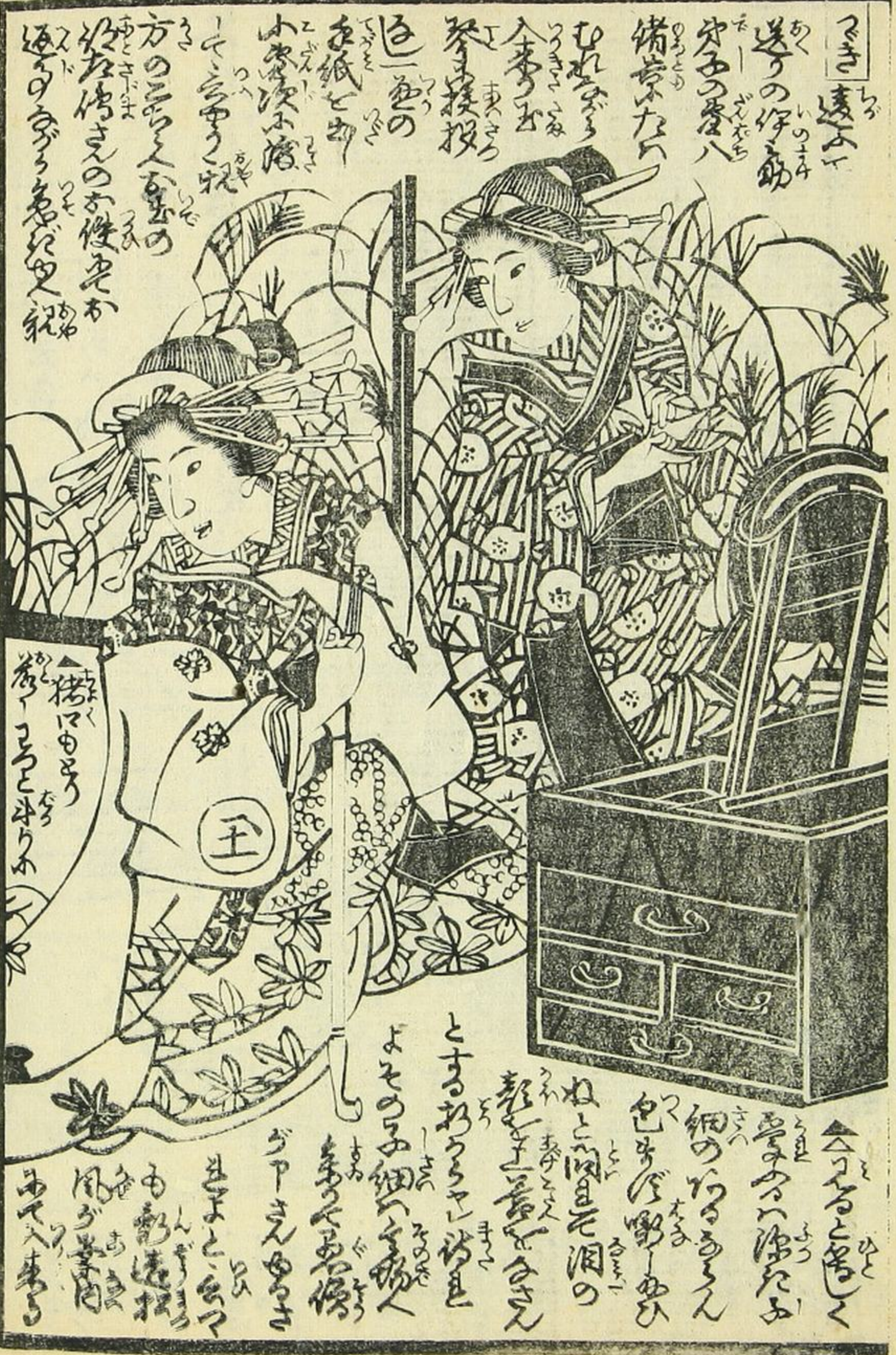


○物遣  
の松  
礼  
上  
と  
後  
の  
あ

互ひふらお解  
心通との流ら  
へと小窓次ハ  
琴の身の上はま  
りくもあつちも  
とねぬ是とい  
余程のゆふ終  
このゆふさ  
あんとを解  
まはるは全  
はまはるは全  
半舟の舟も  
まはるは全  
うら持て来る



○物遣  
の松  
礼  
上  
と  
後  
の  
あ





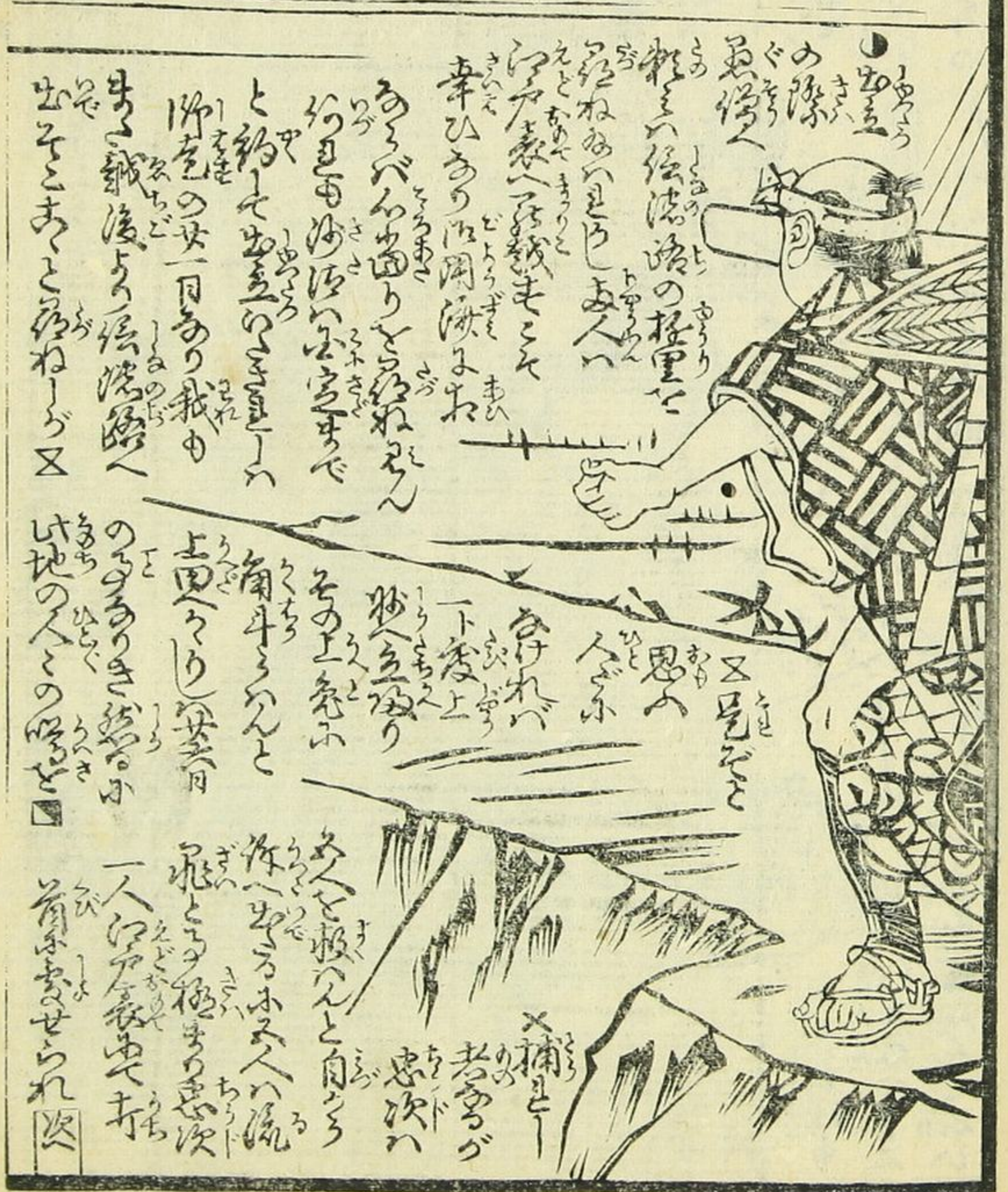
全更  
 よりの  
 備き  
 西去  
 小使  
 聖門

つぎ  
 絶の  
 始り  
 上支

伊  
 大渡  
 捕且  
 為る

日  
 上  
 安  
 傳  
 聖

なほ  
 とて  
 より  
 なほ  
 まる  
 ある  
 即  
 舞  
 の  
 お  
 の



あ  
 の  
 幸  
 あ  
 と  
 出

又  
 思  
 下  
 一  
 上  
 一  
 一

ついでに金角を白丹作らせしむるに  
 今まで忠実な者があつたらうと云  
 せし小女もあつたはむらと云の  
 ありぬらぬはつと云ふは  
 ろうと云ふはつと云ふは  
 白丹作らせしむるに  
 昔人さういふは  
 小をさあはる小女  
 いう小女より先小女  
 あつてさうせしむる  
 奪ひぬ小を腫と云  
 めて様の方小女の方の

△小女を  
 奪ひぬ小を腫と云  
 ぬらぬはつと云ふは  
 小女より先小女  
 小女より先小女  
 奪ひぬ小を腫と云  
 ぬらぬはつと云ふは  
 小女より先小女  
 小女より先小女



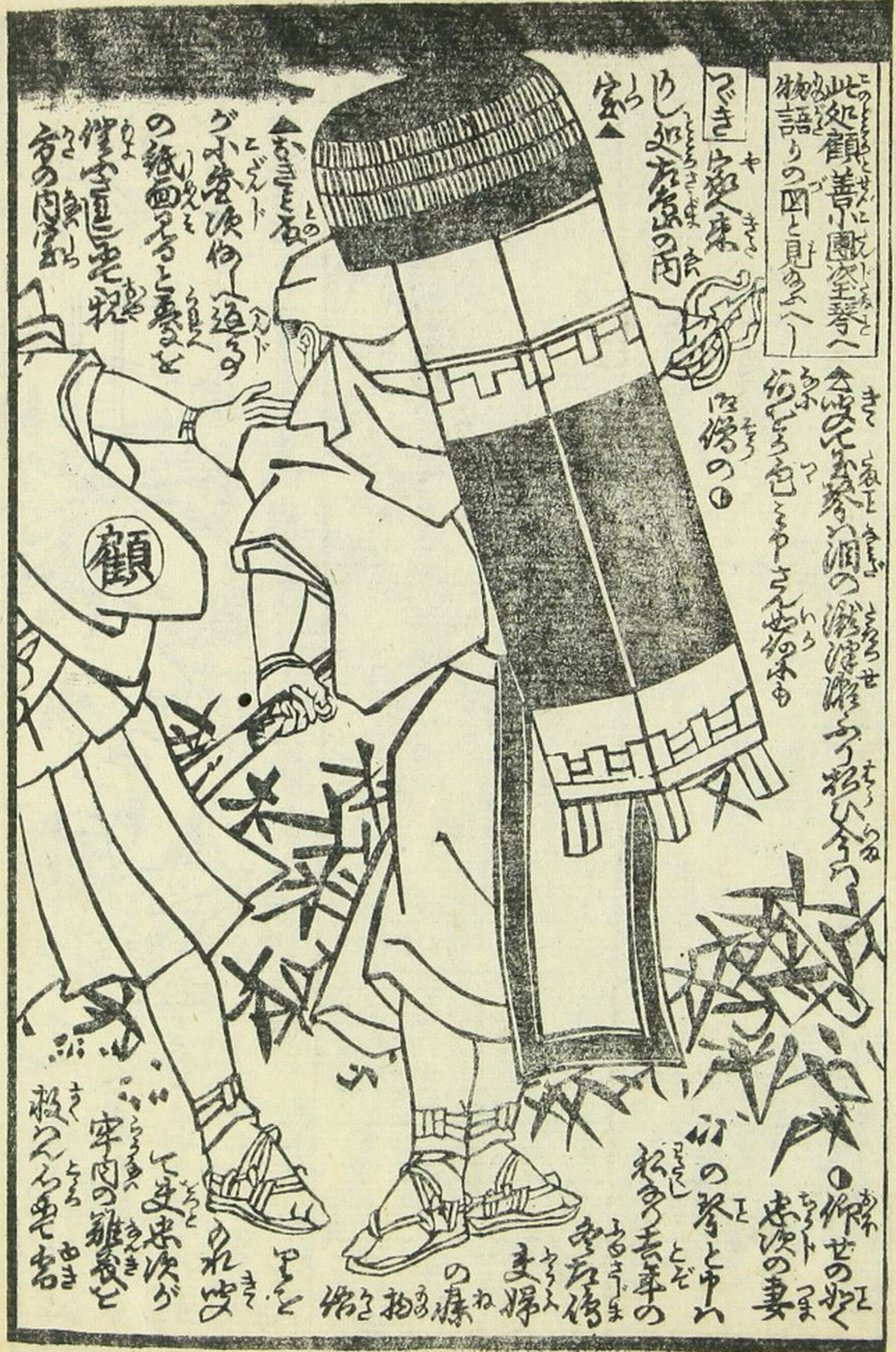
笠をさし  
 法衣を  
 練物  
 捕へんと  
 又人  
 傍と  
 新  
 何  
 遠  
 さ  
 ま  
 為  
 方



△小女を  
 奪ひぬ小を腫と云  
 ぬらぬはつと云ふは  
 小女より先小女  
 小女より先小女  
 奪ひぬ小を腫と云  
 ぬらぬはつと云ふは  
 小女より先小女  
 小女より先小女

此の如く善小園全巻  
物語りの四と見ゆべし

つぎに登場  
り如左の用



この如く  
つぎに登場  
り如左の用  
御前  
の御座り  
の御座り

この如く  
御座り  
の御座り

此の如く  
御座り  
の御座り

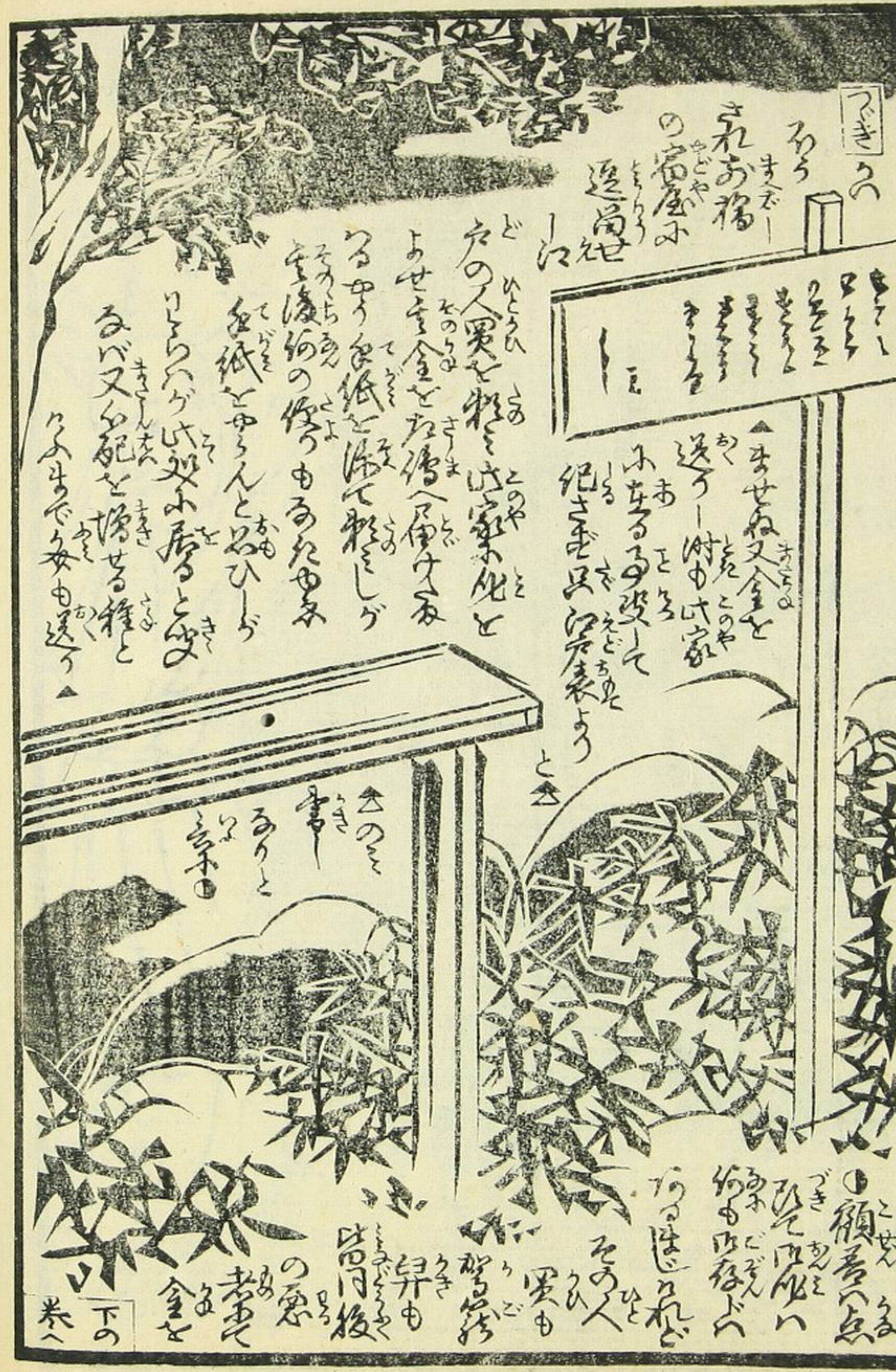
此の如く  
御座り  
の御座り

今と  
御座り  
の御座り



今と  
御座り  
の御座り

此の如く  
御座り  
の御座り



官 朝鮮  
許 牛肉丸  
大包代二十五支  
中包代十三支五厘  
小包代六支五厘

官 たんせいの茶  
許 天泰丸  
一包代五厘

文 錦繪問屋  
出板御届明治三十四年四月九日  
金松堂

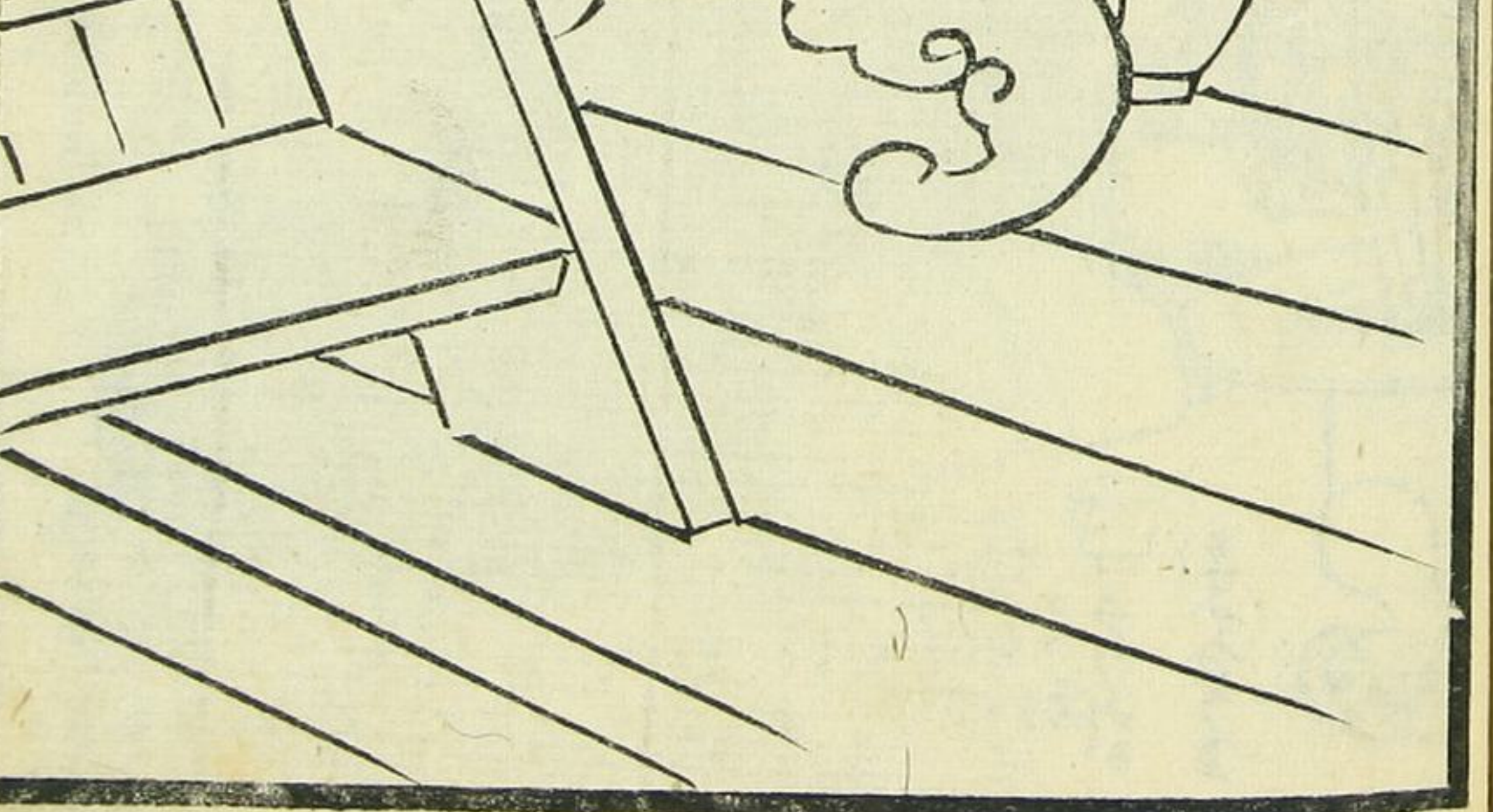
此天泰丸は我分一たんせいのせん  
そくらのまきゅう。あやしくはうく  
。アモのん。ひやう。さんせん  
さんごのせだ。小児而見せれた地  
一切のせだ。月ひて功治連ちあう  
。一。く。本。能。虫。下。絶。一。か

日本橋區横山前三丁目二番地  
編輯人 川上 謂一郎  
出板人 辻 岡 丈 助





中の巻 なかのまき ねる史送らむとて多光とむさんとせしと音なき  
 足願 あしねがひ へさし今も物とぞぬれせし人愛せぬ跡せし  
 由多 よしと 四身の在る 知れしはしりしが今眼の  
 先の さき は里みあるをわゆると  
 べき べき 儀よりの 燈臺 とうだい 下 した とははる  
 べし べし と物 もの のうち小燈 ことう 次 つぎ へ登 のぼ ると  
 方 かた ありて 輝 あかり ぬれぬやうに 射 い ちまひや  
 後 のち かくは 燈 とう 臺 だい 立 た たりし 小 こ 燈 とう 次 つぎ へ  
 ぬ ぬ るよの よの 光 ひかり ながら 大 おほ 燈 とう 臺 だい へ 親 おや 方 かた の 内 うち 室 むろ  
 へ 是 こゝ 光 ひかり を 失 うしな せし 燈 とう 臺 だい 室 むろ へ 由 よし 多 と  
 ありて べし べし と 是 こゝ 光 ひかり を 失 うしな せし 燈 とう 臺 だい 室 むろ へ 由 よし 多 と  
 竹 たけ 不 ふ 必 ひつ ず ず とも 情 なさけ と 幸 さい せき  
 操 さく を ち ち り り の の 心 こゝろ へ へ 入 い り



国史五下



氣色 きしき  
 綿 わた 輝 あかり  
 國 くに 史 し  
 五 ご 魚 ぎょ 人 にん  
 下 した 結 むす ぶ ぶ 死 し  
 満 まん  
 生 なま 松 まつ 書 かき 様 さま

つき 松浦の根の石よりもこの松の  
 君と威遠を継ぐ者なり  
 主人の宝へて血をせし  
 来り一日へ一礼は玉琴ふ  
 向ひあつらん山をひるさ  
 ませ私の乃も大切ある  
 形勢云々 彩高の  
 術商人あや文次并  
 さなとらふ方  
 又世みお出のき  
 けよけけし助さん  
 が程方の心よそ  
 あつらんをい  
 るさよなほどう



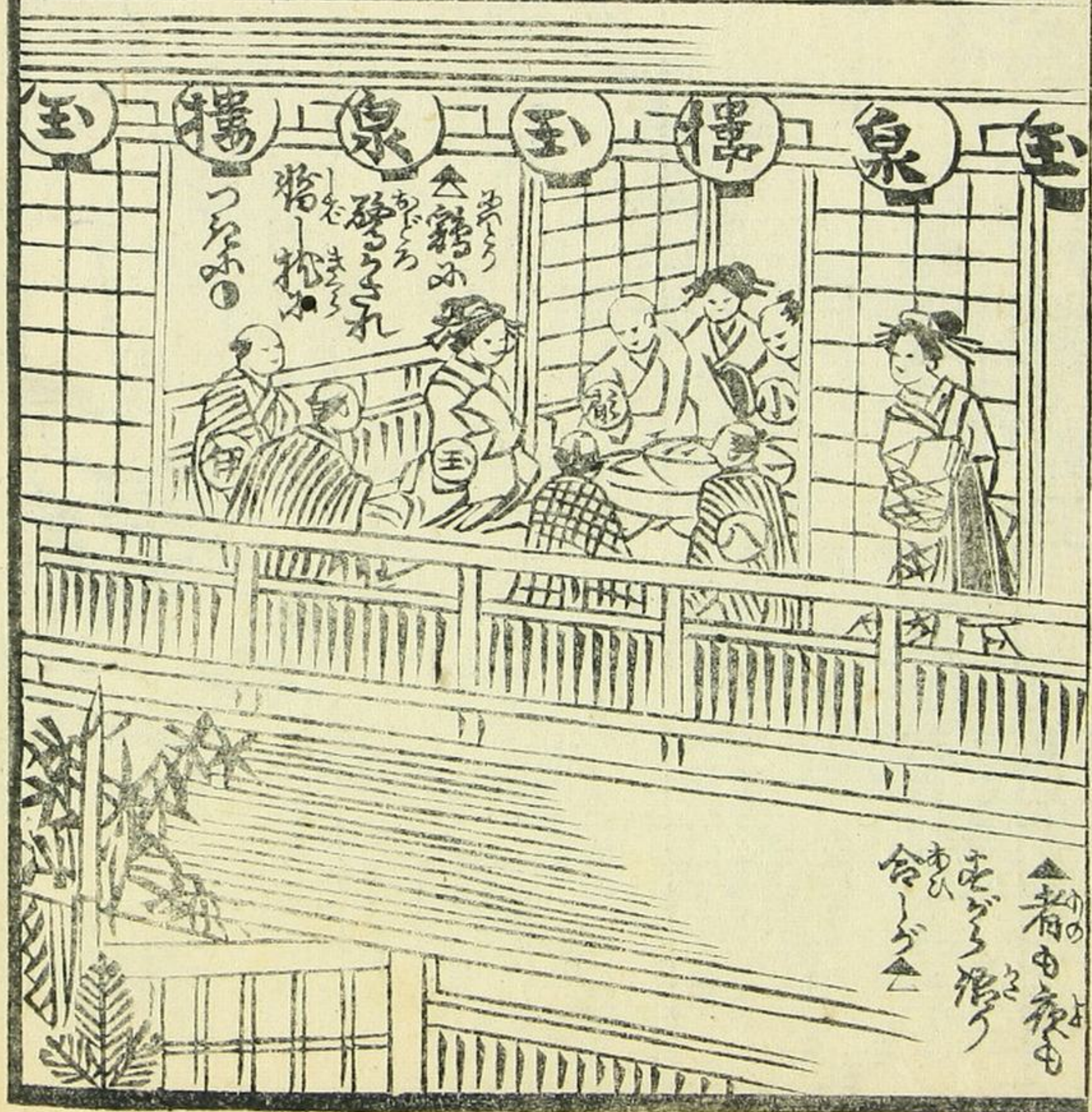
おまて居るほいも母の  
 松下るの  
 あつらんが  
 交りうら  
 公まる  
 金  
 され  
 小の  
 へる  
 せと  
 くれと  
 さあ  
 まあ

いんねとねねー知  
 あつらん  
 松の  
 とのお  
 私  
 ぞ  
 ろた  
 ま  
 谷の  
 にお  
 お  
 三



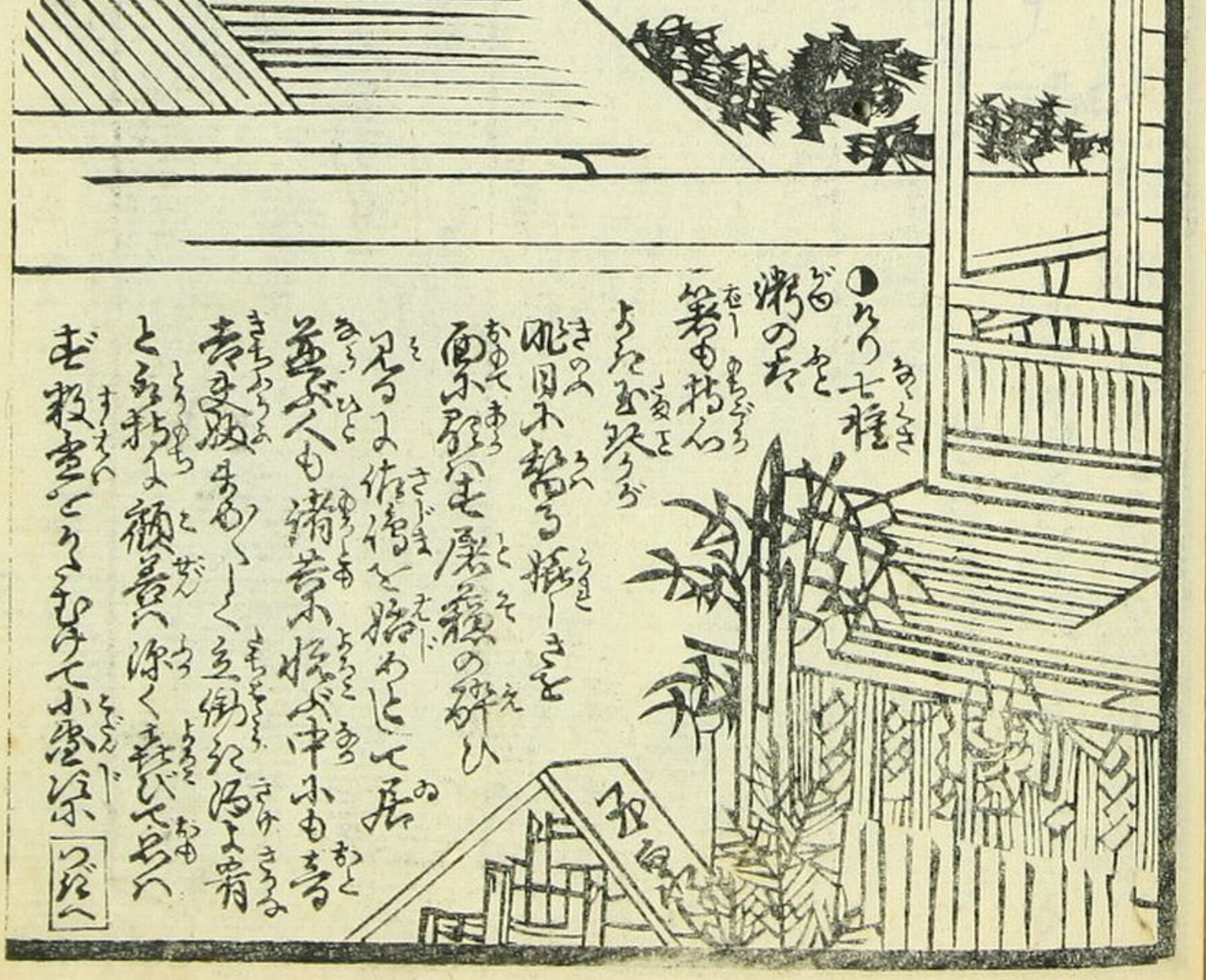
あつらん  
 松の  
 とのお  
 私  
 ぞ  
 ろた  
 ま  
 谷の  
 にお  
 お  
 三

つぎふつり長傳も種々の  
 悪徳のほど事あるを  
 後しつりさ小次郎方の  
 かゆも其のあつく水のえ  
 ちと成る様子の盛を用  
 うとよと顔着のよをみ  
 皆いを聞きをばみ  
 なる形は怪しの海  
 宜も海と家用  
 の者も別と  
 つかさつ  
 顔も徳も  
 玉定も徳も  
 玉家も徳も

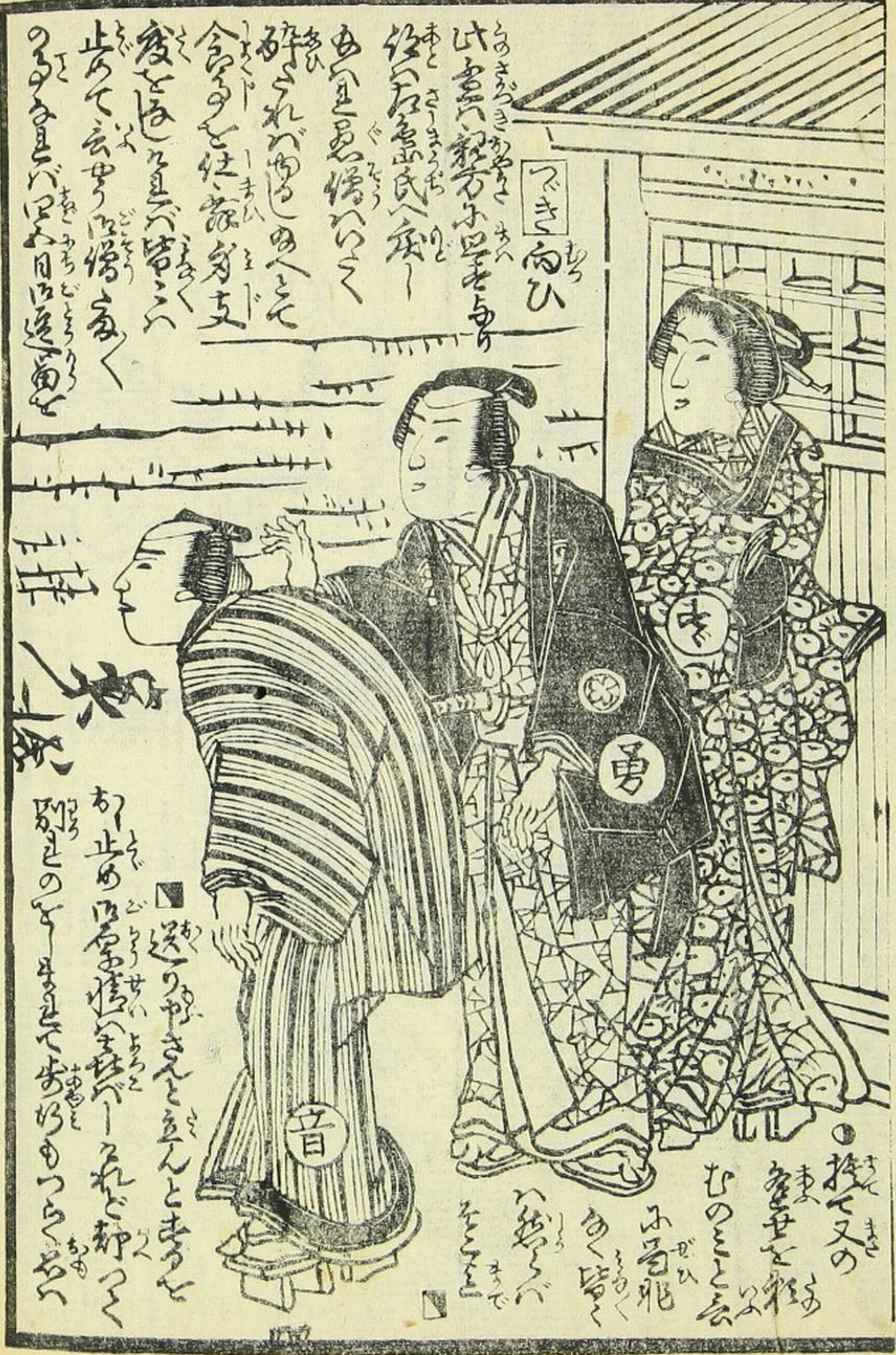


▲前者夜中  
 合ふる

小次郎八作と助  
 子外の者も送りし  
 小次郎もそのおびえ  
 方あつた女中の顔と  
 三人が女小次郎とてさめんと  
 涙も笑ひの顔あどと泪のわたりた  
 べー顔着のあつた小次郎とては  
 ある勇造者の方へおのれの状と  
 送りし小次郎の顔がとておびえ  
 小次郎顔着の足とておびえ  
 依るあつた又  
 勇造者の方へ  
 中ほどは小次郎  
 くさす顔着の足とておびえ



●より七種  
 粥の  
 第一の  
 第二の  
 第三の  
 第四の  
 第五の  
 第六の  
 第七の



けさの朝方子思ふ事  
 任に思ひ入る  
 破れぬ衣の  
 合ふ事とは  
 度とほしき  
 止めて云  
 の

かしの  
 止めて  
 別れの  
 立白  
 又の  
 世を  
 むの  
 小  
 へ



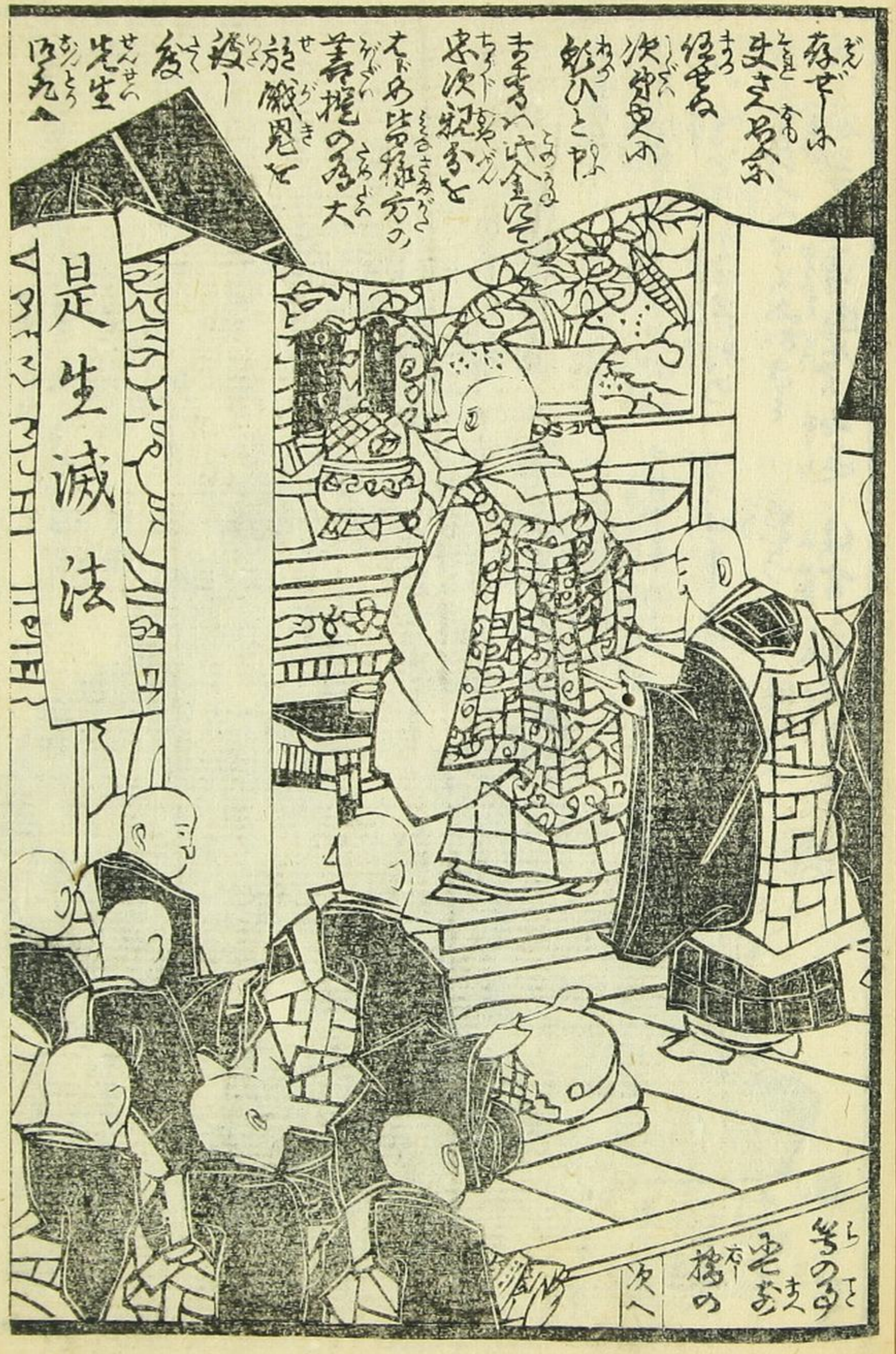
顔  
 うら  
 接す  
 せ  
 目  
 井  
 旅  
 と  
 を  
 西  
 後

とん  
 志  
 力  
 手  
 元  
 分  
 早  
 後  
 の  
 後  
 次



べきりりとそ金おすあせぬ  
 金おすあせぬ  
 後一物もを曲者よ奪ハ  
 見えとる世に小様の親方  
 救はして金のそあを  
 命を助りおれとせんと  
 ありし初つてお世傳おた  
 蔵よりそや奪ハ  
 び金と奪ハ  
 して五終  
 おつんの  
 文  
 世と

斗ふ下さるる  
 小  
 君  
 音  
 伊  
 曲者より久せしことか  
 命を助りおれとせんと  
 ありし初つてお世傳おた  
 蔵よりそや奪ハ  
 び金と奪ハ  
 して五終  
 おつんの  
 文  
 世と



存ずい  
 生まぬ  
 修業  
 次第更ハ  
 妙心と  
 去るハ金に  
 忠次親方と  
 大なる修業  
 修業  
 後  
 先生  
 世と

是生滅法  
 存ずい  
 生まぬ  
 修業  
 次第更ハ  
 妙心と  
 去るハ金に  
 忠次親方と  
 大なる修業  
 修業  
 後  
 先生  
 世と

つぎ芝居も多し徳と初めおなほしうが  
 此月のあつうさ着様を起置な一は家  
 へゆりくるさ小まき水津村の  
 小川たまた方あつう一年  
 徳お君の家おをませ一は  
 追御進進と尊ね一は  
 さふ足おねい尾も若世の徳  
 あつうりえ下をさる様  
 生損十七年のあつうきと  
 さまふ男のつらめさく  
 二年は方うちさけは  
 村のつとまふ定村の  
 なもとのつらふかき  
 なと速おせ一勇造あお遠



公定へまへつる世の  
 中のつとまふ梅の  
 春あつう入様  
 へるあつう二年  
 のあつうあつう  
 ちの片をう様あ町のあつう  
 ねとつとまふ  
 結書一はつとまふ

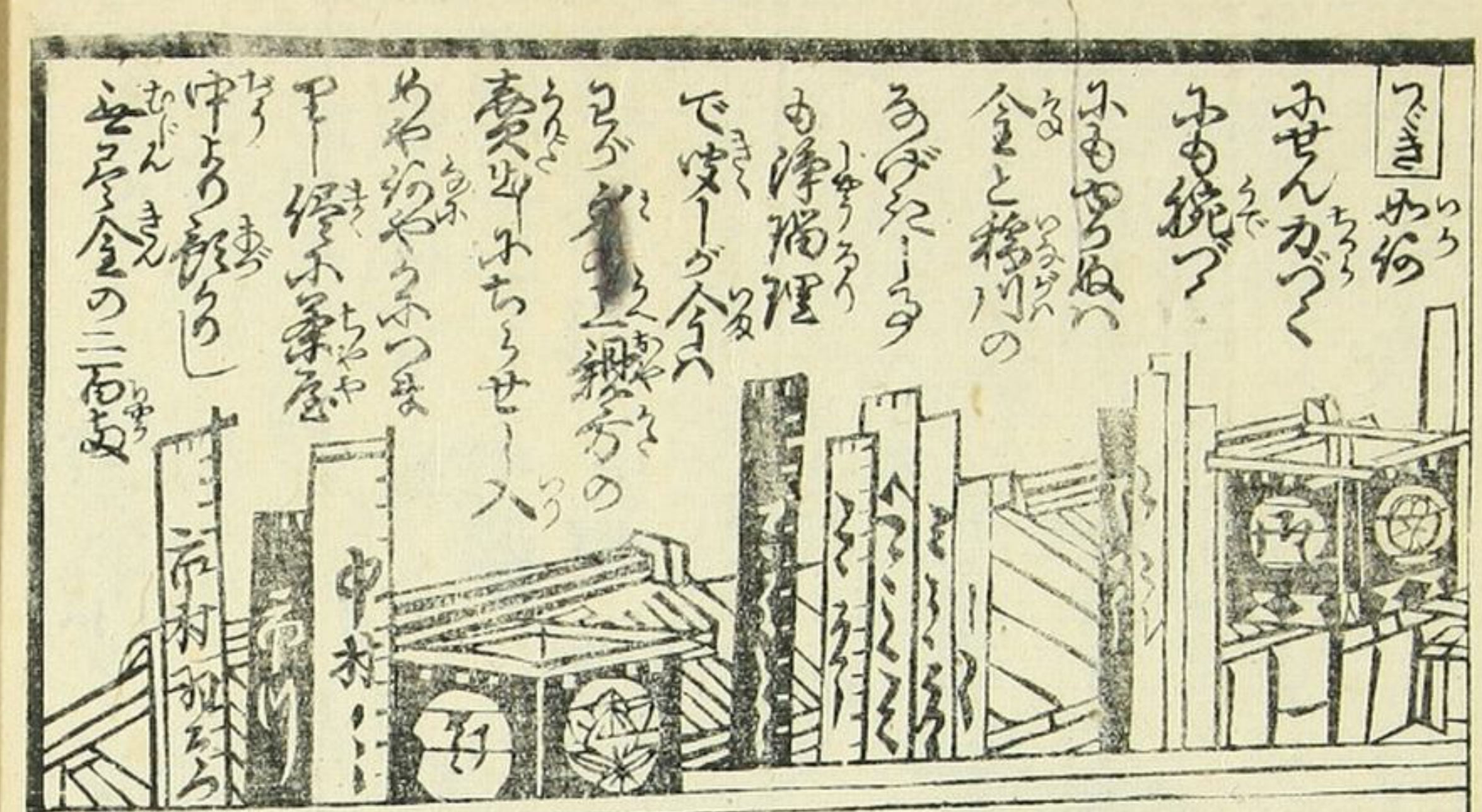
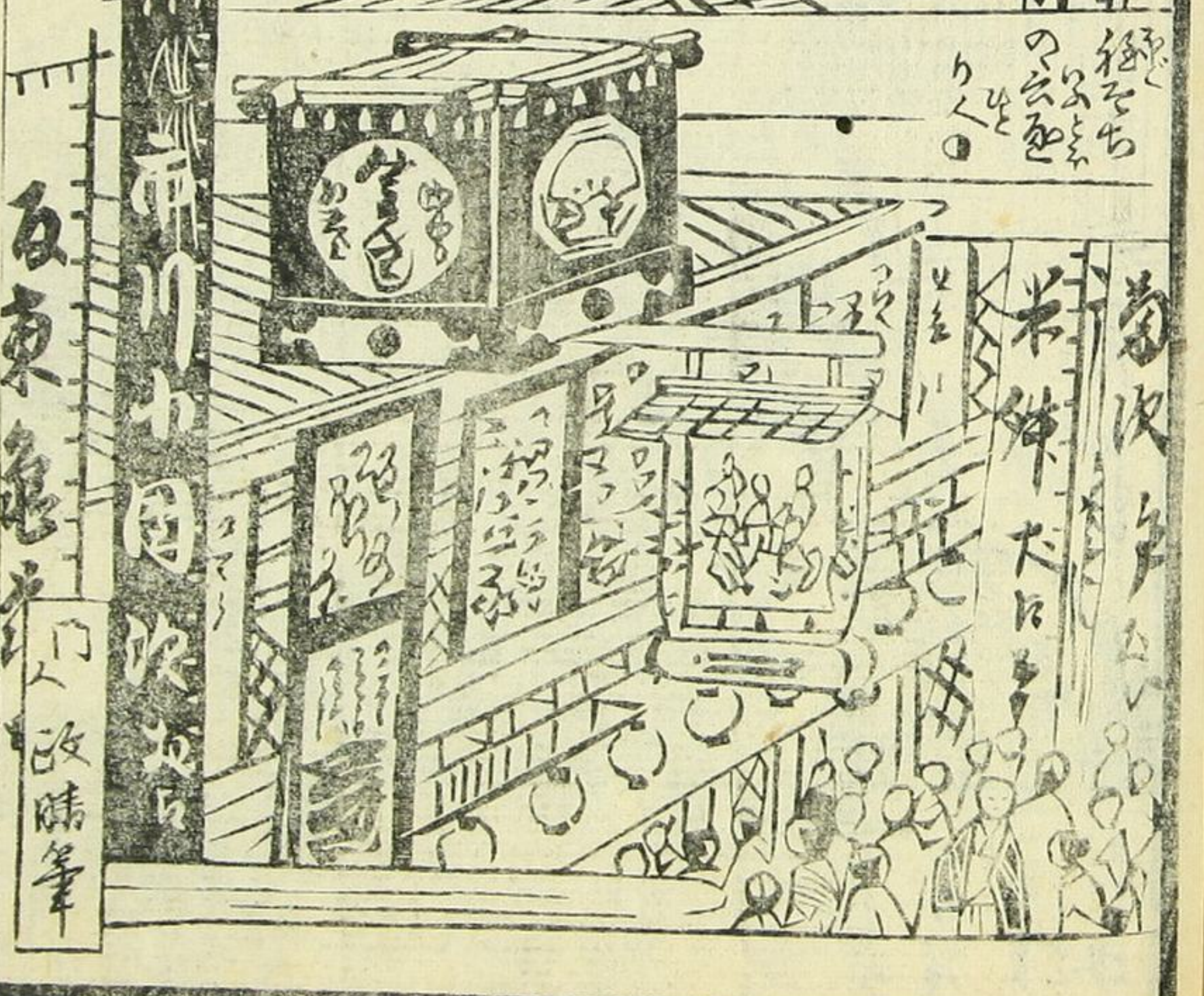
あつうとつとまふ  
 結書一はつとまふ  
 静まの地と

はとさつうのつとまふ  
 年代が紀せ一はつとまふ  
 ちうとあつうのつとまふ  
 徳とあつうの  
 徳とあつうの  
 ねとあつうの  
 おとあつうの  
 さあのかつうの  
 女をさつうの  
 なつとあつうの

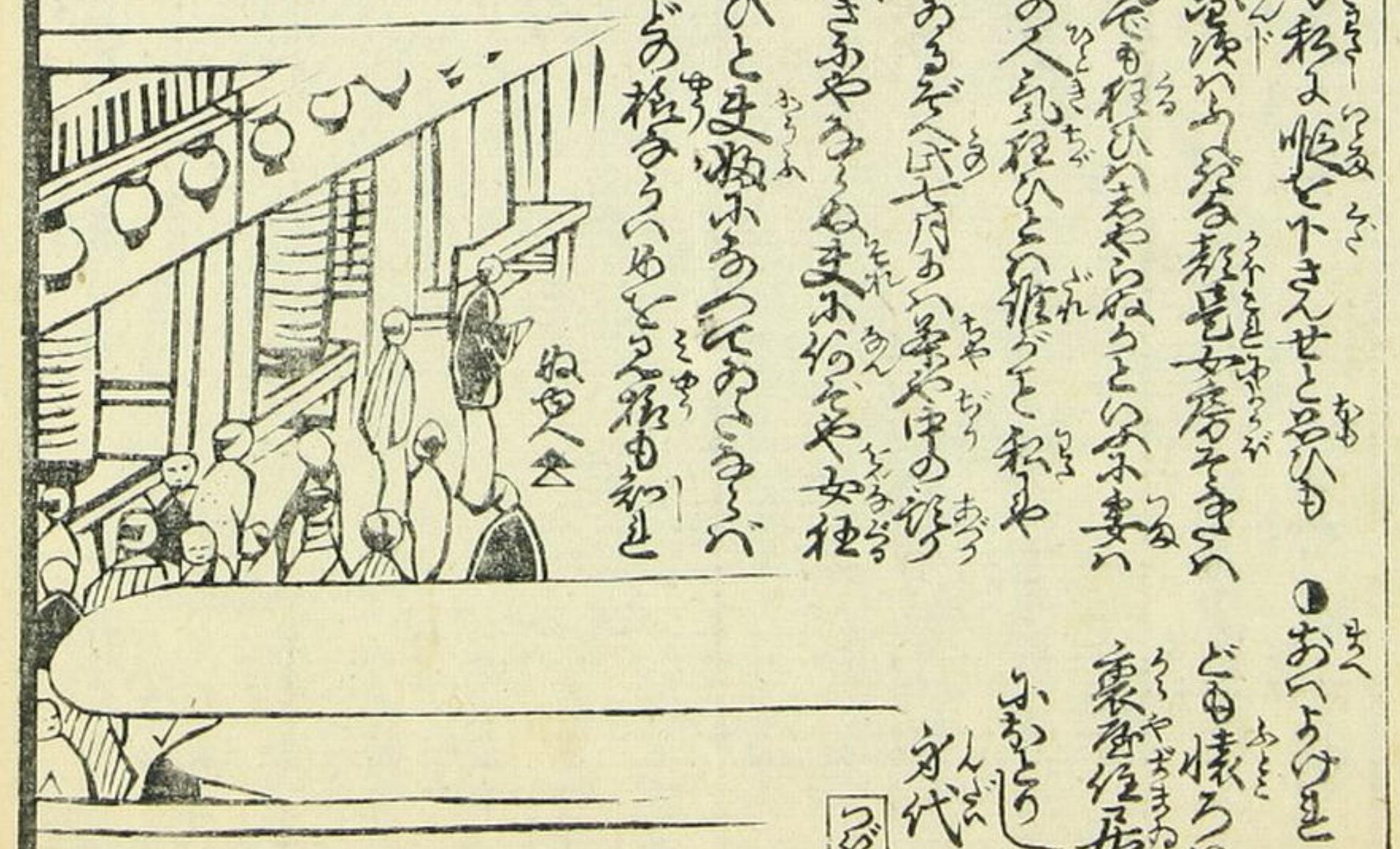


あつうの盛りとつとまふ  
 花え一はつとまふ  
 のつとまふ  
 一人とつとまふ  
 抱とつとまふ  
 一人とつとまふ  
 ねとあつうの  
 さあのかつうの  
 女をさつうの  
 なつとあつうの

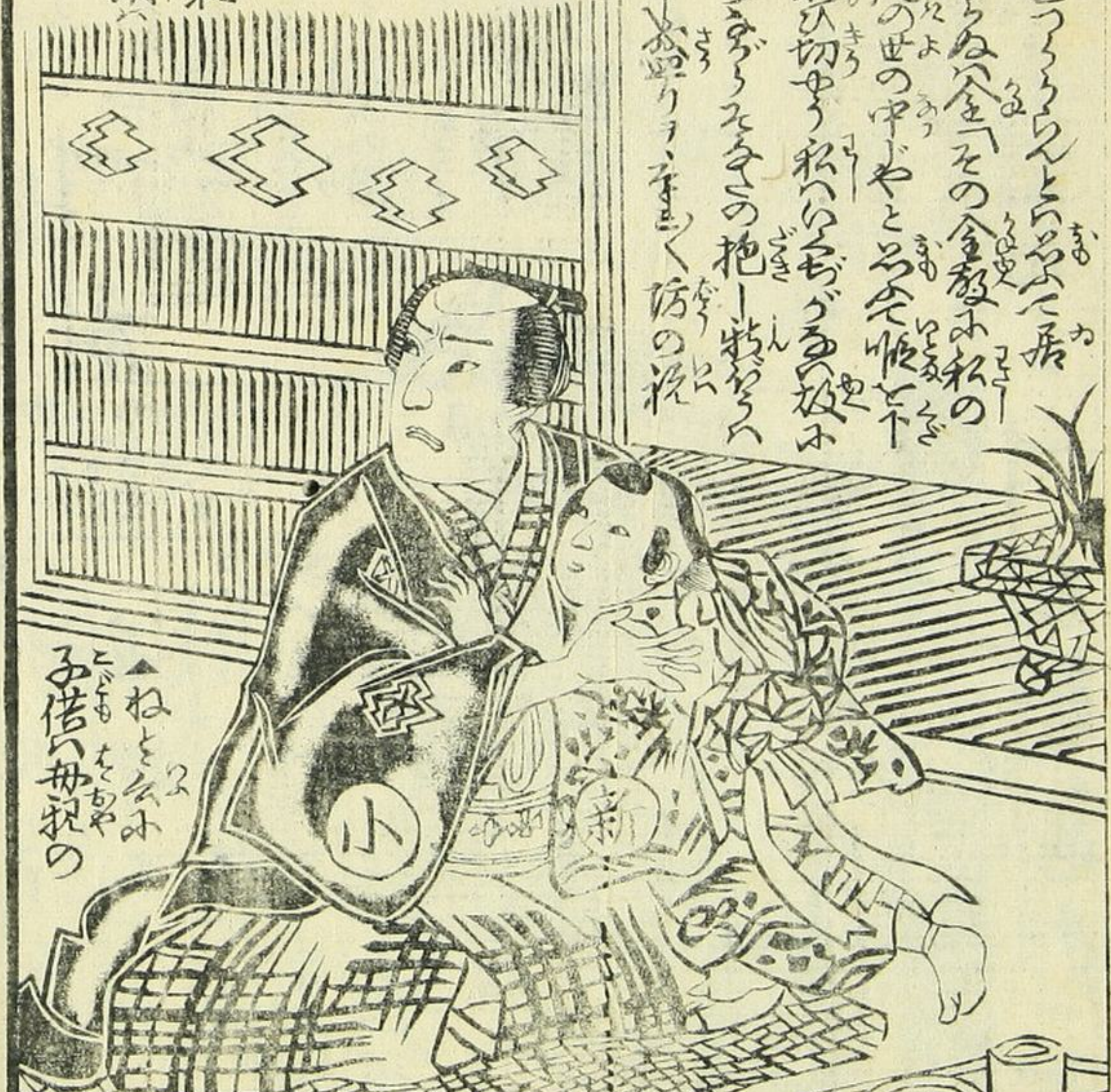
若しあるに三石ありて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...



舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...  
 舟の融通もあつて...



夫を思ふゆゑめづるうらとらふて居  
是れがまづくみもゆく全そこの全教小私の  
帳「イ」金全の世の中やとるハ帳下  
さんせ「コレ」やまひひ切やう私ひらあがる放  
見控らうゆてらうさうそその抱「替」た  
今年との暫ら「あ」り「ま」く「防」の「様」  
ひの「耐」はうのふ  
あつて「ま」ま「抱」て  
蔵「ハ」て「半」て「せ」  
又「後」訪「ま」て「を」  
け「り」や「な」て「ゆ」の「た」  
私「や」幸「ひ」を「と」つ「て」  
父「へ」突「突」れ「ば」次「に」  
真「に」あ「教」へ「さ」す「や」



針  
先  
さ  
か  
む  
し  
な  
と  
し  
の  
世  
を  
し  
る  
る  
は  
ら  
を  
も  
と  
め  
る  
は  
ら  
の  
ね  
と  
こ  
小  
子  
倍  
の  
母  
親  
の

縁ふ徳をてもいふ  
さんぞ「コ」人て「色」は  
私「と」ま「ま」さ「と」父「ま」ん  
の「ふ」と「切」ふ「か」け「め」ま「ら」  
且「ハ」て「あ」く「と」居  
あ「や」う「さ」う  
抱「上」て「抱」  
ら「も」私「め」  
世「を」思「ふ」涙「目」  
と「君」を「さ」す「は」ウ  
見「届」け「よ」る「ま」ま「の」  
幕「の」毎「え」は「今」日  
ら「肉」身「は」あ「か」ら  
より「教」を「ま」て「に」



縁「ふ」ま「ま」さ「と」の「私」  
ら「も」私「め」ま「ま」さ「と」  
は「ま」ま「ま」は「ま」ま「ら」  
考「え」た「ま」ま「ら」  
心「を」私「の」こ  
次「に」  
は「私」の「ま」ま  
世「を」思「ふ」涙「目」  
と「君」を「さ」す「は」ウ  
見「届」け「よ」る「ま」ま「の」  
幕「の」毎「え」は「今」日  
ら「肉」身「は」あ「か」ら  
より「教」を「ま」て「に」







